
夢を見た。

雪月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢を見た。

【著者名】

雪月

2021-8-1

【あらすじ】

その日見た夢を書き留めると「いらっしゃい。・・・・そんな夢の覚書。日記サイトより過去分を転載。今後の更新は夢次第。

脇役の夢

その夢には主人公がいた。

不思議な図書館で不思議な力を持つ案内人と出会い、不思議な世界へと旅立ち、様々な冒険をして成長し、そして元の世界には戻つてこない。

そういう物語の主人公だ。

主人公と共に不思議な世界へと旅立とうとした者たちがいた。

3人のクラスメイト。

ひとりは主人公と最後まで一緒に旅をし続け、互いに支えあう大切な親友となるクラスメイト。

しかし残り2人。仲のよいクラスメイトと仲のよくないクラスメイト。

彼らは共に旅立とうとし、しかし共に旅立つことができなかつた仲間だ。

前者は不思議な世界へと続く案内道までは入ることができたが、案内人の姿すら知覚することができず、旅が始まる前に脱落した。

後者は不思議な世界の入口までは辿り着いたが、自ら悟り旅を諦めた。

そんな、主人公と共にに行くことができず、しかし価値観と人生を変えて生き、久しぶりに再会することとなつた2人の夢だつた。

ランプの夢

魔法のランプの夢だ。

ランプの精の元に一人の男が来た。

彼は自らの不幸を望んでいた。

昔、彼は魔法のランプを手に入れた。そして幸福を得た。

けれどもいつかを手放し、地位も名譽もなく、妻と共に老いて死にたいと言ひ。妻も同じ思いだと。

しかし、男は自分のランプの精を解放してみたが、それで今までの幸福の魔法が終わるわけではなかつた。

その上、彼に幸福を与えたランプは彼を不幸にすることができない。

そういう決まりだ。

だから男は、彼を幸せにしたことのない、彼を不幸でできるランプを探していたのだ。

ランプの精は歓喜にふるえた。

持ち主が欲にまみれた幸福ではなく、不幸を望むこと。

それこそは正にこのランプの精がランプの呪縛から解放されるための条件なのだ。

しかし、他の精霊が叶えた願いをホコにしてそれに反する望みを叶えるためには、男はいくつかの試練を乗り越えなくてはならなかつた。

・・・けれども結局夢は夢。穩やかな老いを得られるのならば、それはどれほど幸福なことかと願いながらも、その結末を知ることはできない。

風船の夢

夢を見た。

それが少年だったのか、少女だったのか。そこが街だったのか山だったのかも覚えていない、そんな曖昧な夢だ。

けれどもきっとそれは幼い頃の自分であり、そしてそこには思い出の中の家の前の道なのだ。

手に黄色い風船を持っていた。

糸を持つ手を放すと風船は、青空に向かって真っ直ぐに飛んでいった。

しかし空には無数の電線が走っていて、風船は、どこまでも上りきることができず、一番下の電線にぶつかって、割れた。

風船の中には紙吹雪に使つ真っ白な紙切れが詰まつていて、青空に花を咲かせたかのように、弾けて散った。

たくさんの、悲しみが詰まつた風船の色は、黄色。

戦士の夢

夢を見た。

私はその夢を『戦士に捧げる15のお題』だと認識していた。

場所は戦場。山の岩壁を彫った古城のような回廊の柱の影かそれとも迷路になつた洞窟の横穴か。

わき腹に大きな傷を負つた元英雄と、剣と心が折れた戦士がいた。

他にも戦いに疲れた仲間たちが幾人かいた。

彼らの会話などからなる15のシーンで夢は構成されていた。

そのシーンにはひとつひとつに素面で聞くには居たたまれないようなハードボイルドチックに気障なセリフの題名がついていた。

最後、剣の折れた戦士が仲間の戦斧を手に持ち、影の中から光の中へと出て行くその背中の逆光の眩しさがひどく印象的な、そんな夢だった。

鬼子母神の夢

夢を見ていた。

江戸の長屋、病んだ女がやつれた顔で乳飲み子を抱いていた。

この子に生きてほしいと泣いていた。

別の場所、一人の男が文机に向かい、写本を作っていた。

男はこの世の不思議に少しばかり足を突っ込んでいた。

特殊な薄い墨で、赤子を喰らう妖怪が、情に絆され業に逆らい、人の子を育てようとしている話を綴っていた。その墨には様々な願いが籠められていた。

賑やかな通り。

男は女と擦れ違う。

女は若々しく病みの影もなく、一ぱいぱいとした身なりで、擦れ違う男に会釈して通りすぎた。

子どもを連れてくる気配はなかった。

そんな、悲しい夢を見ていた。

戦場の英雄の夢

夢を見た。

3人のヒーローがいた。

少年と少女、そして男。

名前はなかった。

彼らは正義の味方という意味でのヒーローではなく、戦場でのヒーローだった。

軍部の思惑とマスコミにより祭り上げられただけ。実際は精神制御を受け強制的に人を殺した生き残りの3人だ。

戦争に勝ち、3人のヒーローがいる施設は面会人に溢れていた。

見せかけの明るさに満ちていた。

それを破つたのは男の暴走。

施設を破壊し、瓦礫の上で男は少女を殺した。少女はやっと死ねる

と、涙した。

少年は男に「何故」と問いかけた。

男は「何故と問うか」と苦笑した。

そういうえばお前に面会に来たのは年寄りだけだつたなど。

年寄りというのは少年が世話になつた老夫婦だ。

確かにマスコミの矢面に立つたのは男だ。ミーハーな面会に対応したのも、男。

周りを英雄だと称賛する人々に囲まれて、ああ、その憧れに染まつた表情。子どもたちの尊敬に満ちた目。それらに晒されるのがどれだけ苦痛なものなのか。

知つてるのは、男だ。

追い詰められた男だけだった。

・・・・という、救いのない夢だった。

夢の中では、3人の葛藤も悲嘆も悔恨も死を望む気持ちも、全てが手に取るように分かつたのに、目覚めてみればその感情は指の間からすり抜けてしまつて分からぬ。

剣と魔法の世界の夢

夢を見た。

魔王を打ち倒して8年後の世界。

モンスターはたまに現れ騒ぎを起こすけれど、脅威は去り、世の中はそれなりに平和だった。

当時16才の少年だった勇者も青年になり、しかし彼は、モンスター退治にも政治的人間の醜さにも疲れ、ぼろぼろのブロンズソードを手に旅に出る。

・・・女装して。

何が言いたい自分の夢！

かつて世界を救つた勇者は各地で人助けをしていて、色々な逸話が今でも色褪せずに語られるけれど、実際のところはなよなよした女言葉のおかまヤロー。小さな生き物も殺せないへなちょこヤロー。

昔の仲間も呆れるか見て見ぬふり他人のふり。

途中知り合った元気な少年とかに馬鹿にされつつ、時折つい地が出
ちゃつたりして、今日も旅は続く。

本人は今が幸せ。

そんな夢。

滅びの夢

とある種族が別の種族（少数民族）を滅ぼそうとしていた。

傭兵のような立場にいた戦士たちが、命を捨ててそれを救つた。

戦いの前、戦士たちのリーダーは滅びの種族を救おうと決めたが、だからといって仲間たちと共に戦えと、つまりは赤の他人のために死んでくれとは言えなかつた。

けれども仲間たちは、言われる前から戦うのが当たり前だと思つていた。

誰かを救うために戦つて死ぬのは、誰かを滅ぼすために戦つて死ぬより悪くない。さあ行きましょう、と。

武器を手にして笑つて待つっていた。

人殺しは罪だ。

戦争は愚かだ。

けれど、死ぬと分かっていても、人のために武器を手にし、笑つて戦場に向かつた戦士たちの戦いを、そしてその心を、愚かだと笑うことはできない。

そんな夢を見た。

夢を見た。

緑色のカマキリが鎌谷霧之進といふ名前の流れの剣士でも、人間『同様』に空を飛んでいても、誰も不思議に思わない世界だった。

人も空を飛んでいるだけあって、東京のように高層ビルが乱立していた。

なのに、一番下は川の下町のよひじけりやがやがやがやしていた。

さて、このカマキリの田那、冷静沈着やうにみえて情に厚く突っ走りやすかつた。

また、このシマを預かる姉弟の弟が更に直情的、猪突猛進で馬鹿だつた。

騒ぎが起きないはずがない。

勘違いやらなんやらで大騒ぎ。

喧嘩はお江戸の華、これを乐しまないでビうすると、一本坂の道に屋台まで出でのお祭り騒ぎ。・・・・置屋の女やハ丁堀も出てきて、いつの間にやらすつかり時代劇。

誰もかれもが真っ直ぐ裏なく、久しづりにすかつと晴れた気分になる、そんな夢だった。

闇の騎士の夢

バットマンの夢を見た。

スーパーマン等、超人たちの集つ世界。

闇をまつたところで彼はただの人で、ゴッサムは犯罪都市で、助けたくても助けられないものが指の隙間からぼろぼろと落ちていく。それでも命がけで怪人たちと戦つて、ビルが壊れたり地面が陥没したり。

そんなバットマンの毎の顔はブルース・ウェイン。

彼に向かつて訳知り顔に言う者がいた。

街が壊れるお陰でウェイン「一ポレーションへと再建の受注が途切れるこはない。毒薬がばらまかれたと思えば、すぐさま新薬の発表だ。怪人さまますな。

なんてことだ。いかにもブルースが黒幕で、裏で糸を引いているんだろうと言わんばかりのその口調。

そんな、悔しくて仕方がないような、やるせない夢を見た。

夢の中でテレビを見ていた。

2時間のスペシャル番組で、一人の男子高生が核兵器で死ぬところから始まり、そこにたどりつくまでの経緯を、時間を遡るようにして語る番組構成だった。

家族が死んで幼馴染みの女の子も死んで、そんな様子が少年の後悔の記憶のように語られた。

時間は少年の生まれる前へと更に遡り、歴史の因果にまで触れた。

日本に良く似ているが日本ではないその世界。銀色に鈍く光る近代兵器がすらりと並んでいた。

番組が終わってからも夢の中で、幼馴染みからの最後の通信に応えなかつた後悔やターニングポイントについてをぐるぐるぐるぐる考えていた。

夢の中なのでとつとめのない思考はそのまま映像化されて、例えば

西遊記の三蔵法師が妖怪にたぶらかされて闇に捕われていたりした。

悟空はお師匠さまを助けに来なかつた。

長い夢が終わつて目が覚めた今も、深い思考の淵に沈みこんだまま
ずっと、人の生と死、歴史の光と闇についてをぐるぐると考えてい
る。

聖なる灯火の夢

夢を見た。

そこには聖なる火が灯っていた。

それは神様が点けた火。誰もがその明るさを崇拜し、希望を託す信仰の対象。

たぶん、ギリシャの聖火のようなものなんだけど、あの青い海が似合う白い石の神殿ではなく、険しい山の上にある寺院は日本の禅寺かチベットのラマ教かといつような東洋風。

僧衣もそんな感じで、火の当番は持ち回り。

その日の夜番は若い僧侶（といつても平均年齢高めな寺での若造。30代か40代か）で、しかし夜の冷たい風がひゅうと吹いて、彼の目の前でその火は消えた。

おこおこざるんだよと、パニック。

なぜなら、その火が照らしてきたものとか綿々と続いた時間の長さとか、人々の祈りとか、その積み重ねられてきたものが全部自分の田の前で崩れて、どうしても取り返しがつかないものが多くなるから。

顔面蒼白で凜としていたら、そこにひょっこりと老師のような僧侶が顔を出す。

「あ、あのこれは」あわあわとしていたら老師「ああ、また消えたんだ」と懐からライターを出して、ぱちりと、なんでもないことのようにまた火を点けた。

「…………え？」

「よく消えるんだ、これ。遠くから見えるようになって、こんな山上の高台に吹きついでいるのが間違いだよね」

そんなんでいいのかと聞いてみたら、こつもこつだとあっせり返してくる。

元々神様が何千年も前に点けた火なんかじゃなくて、それどころかしじつちゅう消えでは僧侶が火をつけているんだそうだ。

・・・・つまりこの夢、信仰なんてそんなもの（イワシの頭も信心から）といふ、自分の宗教観の表れなんだろうか。

ひとりでなしの夢

今にも死にそうに弱った、ラットのような生き物を拾つてしまつ。

更に不思議な出来事が。

彼が彼であることを知り、すたもんだがあつたなりに、まあいいかと友であり続ける決心をしたんだけれども。

さて、彼が彼であることを知らずに、友となつた青年がひとり。

でも好き勝手やつてているのは、彼が異質だから。先祖返りというか、「彼が先祖」というか、二ングンではないものだから。

自由気ままに生きている王族がひとり。

岩山を削り出して、街 자체が強大な城のようになつてゐる街。

魔法が生きてゐる世界。

時代的には中世。

手の中でぶるぶると震えるそれは、寄生しないと死んでしまうとい。

青年は悩む。

この見るからに庇護欲を誘われる小動物をこのまま見殺しにするか。

自分がニンゲンではなくなるか。

ちなみに王族、自分は既にニンゲンではないのでその辺の悩みは理解できない。

ところが、どうせならこのほうがいいなあと思つてゐる。

それ畢つかぬ。・・・・とこゝ時に夢も終わりに近付いて、夢の中で自分は青年が決断して寄生されてそれが夢の終わりだということも既にもう知つている。

なのに青年はいつまで経つても優柔不斷に決断しない。

あいおいいいからもう決めようよ、と思つてこらぬ内に夢がホントに終わってしまつて、いまいち消化不良。ジ・ヒン。

そんな夢だった。

夢を見た。

元は名門の武家のお嬢様が、家族みな死に転がり込んだ先は、悪さも引き受けの傭兵のような一団。

今回引き受けた仕事は、豪商の息子三人の暗殺。

様子を伺つて、お嬢は次男坊と声を交すように。

他家の家令の振りをして姿は見せず。それなりの教育を受けていたお嬢と本を好む次男は学問の話題で盛り上がり、他にも色々なことを話し合つようになる。

仲間たちはこの接触を「仕事をしやすくする手段」とみていたが、お嬢の胸に浮かぶ言葉は「殺せない」。

その上、長男ともばつたり顔を会わせて互いに一目惚れ。これはもう殺せない。

そんな折り、不要な戦闘発生。

お前が情に流されなければ、殺さないで済んだはずの命も殺された。

そう言いながらも、お嬢をかばつて死んだのは、この荒くれ集団に入る時から何かと面倒を見てくれた傭兵。

夢は夢。

その後彼女がどうなったのかは、知らない。

女の夢（後書き）

その名前は、女。

大きな魚の夢

夢の中で青年が異国を旅していた。

大河で一角のようなシャチのような大きな魚（魚ではなかつたのだ
ろうが。）には一角としよう）が水面に跳ねた。

それをカメラにおさめたり、子供とほのぼのと交流したり、のんび
りとした旅のはずだつた。

しかし、ふいに爆撃が始まる。

他の人たちと河の中を逃げる。

途中、その一角に頼つて、なんとか助かる。

桟橋の上で助かつたのかと息を吐く青年。

一角がその長い角を座りこんだ青年の肩に寄せる。

随分となつかれたものだと笑つた青年の目にいつつたのは血の赤。

一角は爆撃に大きく腹をえぐられて、死んでいた。

なんて理不尽な死。

戦争といつ理不尽な暴力。

その時の青年の慟哭と憤りは激しいものだったが、しまえばその感情もおぼろげになつて消えるだけ。

夢は夢。覚めて

ヒーローの夢

喜劇役者も言つていた。

ひとり殺したら殺人犯、たくさん殺せば英雄、と。

アクション映画の中のヒーローたちは正義のために人を殺し、船は炎上しひルは倒壊し、味方の死を見送つてひとり生き残る。

人が生き残るために人を殺すのは、善か悪か。

人はどこまで醜いのか。・・・・といつ前ふりをしつつ、夢の話。

夢の中。

マフィアの抗争のようなものに巻き込まれ銃を渡され、「どうせお前に人は殺せねえだろう」のチキン野郎」と蔑む男に向かつて引き金を引いた。

籠城に失敗し、逃げることにも失敗し、けれど逆転するために、手榴弾のつまつたバケツからひとつを取り出し、安全ピンを抜いてそ

のままバケツに落とし夢は終わった。

・・・・人が、生き抜くために人を殺すのは、善か悪か？

実際に殺されそうになった時、生きるのに必死でそんなことは考えないのだろうと、そういう夢だった。

人は本能で生き、しかし本能で人のために死ぬのだろう。

ひとつはなぜか昔なつかしの『パタリロ』で。

とある国を訪れたパタリロがふたりの青年実業家に出会ってひつちやかめつちやかにかきまわすつていうギャグだと思つていたら、といふがどうい。

実はその青年たち裏では革命家してて、圧政を強いる自国の国王の晩餐に、マリネラ国王に会おうと銃を手に乗り込んでくる。

パタリロはそれを知らず呑氣に歓談していく青年が会いたいという取次を耳打ちされて「それは会わないといけないな・・・・」の食事の後に」と料理に舌づみを打ち、そしてその間に青年たちは殺されてしまう、という、力ある者のわがままは時に傲慢だというシリアルな夢が一本。

もうひとつは和の旅館・・・というか、団体旅行によくある昼食をとる食堂兼ねているようなところで、そこは深夜も大賑わい。

なぜなら死んだ人たちが死出の旅の途中に立ち寄つていくから。

でもオカルトじゃなくて、まさに旅館の宴会状態でなんだかほのぼのとしていて、死んだ後の世界にもルールがあつたり事情があつたり様々な人間模様が繰り広げられるどことなくしんみりとする夢。

市街地で銃撃戦が行われるハードボイルドちつな、けれど戦場の夢だった。

男は交通機動隊から引き抜かれて激戦区の隊に入った。

しかし初陣はボロボロ。

足手まといと罵倒されての途中退場。

役立たずのお荷物扱いに心が折れて、そのまま隊を逃げ出した。

そして、はみだしものが集まる隊（奇人変人ばかりだけど皆優秀）で居場所を見つける。

後にルー・キーが入ってきて、そのルー・キーも初陣はボロボロで。

「優秀な刑事だった・・・はずなんすけどね」

といふ苦い自嘲に、俺も昔そつだつたよと当時を思い出して愕然とする。

分かりにくかつたけれど、彼らの不器用な言動の裏側で自分は随分と歓迎されていたんじゃないかと。

実際、当時を知るメカニックに確認したら、隊の連中は新しい仲間が増えることに浮かれていて、彼用にカスタマイズしたバイクも用意しようとしていたと。

そしてあの戦場でほとんど皆死んだと。

ではあの追い払うような罵声も（実は極限状態で混乱していた彼が気付かなかつただけで）逃げて生き延びるという意味だったのかと、よひやく気付く。やつと氣付く。

後悔と自己嫌悪に彩られ涙で終わる、そんな哀しい夢だった。

少女の夢

ファンタジーだ。

とある村に少女が住んでいた。

少女は神だった。

少女自身はそれを知らず、自分を周りの村人と同じ人間だと思って暮らしていた。

村人は、少女が人間ではなく神であることを知っていた。

少女がいて、笑って暮らしている。

それだけで神の恵みがあることを知っていた。

だから敬い、愛した。

少女と村人たちとは共に暮らしてはいたが、その間には見えない壁があつた。

その認識の差により、少女は孤独になつていいくだろう。

笑みも感情も消え、確かに神になつていくのかかもしれない。

もしかしたら変わらずに、人間を愛し人間の中で暮らしていくのか
かもしれない。

・・・しかし、夢は夢。その先のことは分からぬ。

サンタクロースの夢

サンタクロースの夢だ。

たぶん『サンタクローズ』の影響で。

世界中の子供たちのリストを『良い子』と『悪い子』に分ける作業をハロウィンまでに終えると、サンタクロースはプレゼントの準備を小人たちに任せ、クリスマスの夜に備えてひと眠り。

けれど、サンタクロースは寝ぼすけなので起きるのがとっても苦手。枕元には一ダースの目覚まし時計を用意されていた。

・・・・というほどのしたストーリーだったはずなのに、途中から何故か別の話に。

ゴッサムの町の片隅で膝を抱えてうずくまる孤児。「サンタクロースの来ない僕は悪い子なんだね」と悪の道をまつじぐ。

長じてはクリスマスを憎むヴィランとしてバットマンの前に立ち塞がる。

「サンタクロースなんていねえ。神様なんてウソを」といつ救いようもないものに摩り替わって、あら不思議。子供の夢を踏み潰して、いつの間にやらそこには絶望しかない。

なぜ、コツサムかと思わないでもないが、きっとあの世界にはそういう救いよみがない悲惨な話が似合つからだろつ。

子供に夢を叶えるクリスマス。そしてサンタクロース。

ああ、「神様なんていねえ」といつのと「神様はいるがお前の不幸は見て見ぬふり」といつのとでは、どちらがよりいつそう絶望感が大きいんだろうか。

ミステリーの夢

青年が故郷に帰ってきた。

10年に1人という「帝医」の資格を取り、しかしその職には就かず、従兄弟と同じ軍人になるために。

駅に迎えに来たのは、その従兄弟と友人である。

両親も兄も数年前に他界していた。

いまや戻るべき家もなく、伯父の住まいに厄介になる。

深夜、電話の音に呼ばれた気がした。

起き出して、一階の廊下へ続く戸を開けようとした時。

リーンー!といふ、耳をつんざく音。そして微かに聞こえたのは「ヘルプ」と言つぐもつた声。

戸の向こうに誰か居る？

一気に覚めるぜ。

蹴り開けた戸口の向こうへ。まず見えたのは、ナイフ！

斬りかかるナイフをぎつぎついで避けて、みぞおちに叩き込む「じふし」。

取り押された賊を従兄弟に任せ　あのぐぐもつた声は従兄弟のも
のだったのだ　警察に通報するために、廊下の壁にかけられた電
話に向かつ。

受話器を耳に当てた途端。

「

声が聞こえた。聞こえたはずなのに、なんと言ったのか。何故だか
まつたく分からなかつた。

直ぐに、ツーシーといつ音に切り替わつてしまつた。

あれは。

……死んだ兄の声？

いや、そんなはずはないど、軽く頭を振りながら警察にコールした。

無事に終わつて、その頃には家のものは起き出していた。

「助かつた」

安堵の息を吐きながら、礼を言ひ従兄弟。

「よく気づいてくれた」

ぽんと肩を叩いて言われた言葉。

「電話が鳴っていたおかげだよ」

そう答えたが、誰も電話のベルなど聞いていないといつ返事。

電話は鳴らなかつた。

兄さん！

時代も街並も軍人も、古い時代のそんな夢。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318v/>

夢を見た。

2011年11月23日21時46分発行